《書評》

Sarah Balkin,
Spectral Characters: Genre and Materiality on the Modern Stage
Ann Arbor: U of Michigan P, 2019

石渕　理恵子

本書では、“spectral characters”―非実体化したキャラクター―が、何を表象（represent）するかではなく、何によって形作られるのか（時には役者により、舞台装置により、時には小道具や言語により）と、その演劇的効果とが分析されている。そうすることで、著者のSarah Balkinは、物質的（material）あるいは想像上（imaginary）の亡霊たちが如何に近代演劇を変容させたかを明らかにすることを試みている（4）。Balkinは、メルボルン大学の上級講師であり、19世紀後半から20世紀初頭の演劇、とくに喜劇とジャンル研究を専門としている。2009年にUCLAで修士号、2012年にラトガーズ大学で博士号を取得している。現在は、アメリカ、英国、オーストラリアにおける喜劇、特に1830年から1930年の喜劇におけるデッドパンの歴史や現代のクィア・フェミニスト喜劇におけるその影響について着目している。演劇が物質性（materiality）や役者の身体に依存することは、従来、審美的自律性（aesthetic autonomy）や脱人間化（depersonalization）といったモダニズムの原理と相容れないものとされてきた。Balkinの主張は、近代の劇作家たちは、人間が架空の存在であり、衣装や舞台装置、小道具や対話などで作り上げられ、また変わりゆくものであることを、実は強調したのだということである。本書は主に19世紀後半から20世紀中頃に活動した劇作家たち（Henrik Ibsen、Oscar Wilde、August Strindberg、Jean Genet、Arthur Kopit、Samuel Beckett）の作品を取り上げながら、キャラクターが「見かけ上死んでいること」（“the apparent deadness of characters”）―キャラク

ターの非実在性（あるいは非実体性）ーに着目する（3）。本書で語られる“spectrality”と“deadness”は相互に結びついており、“spectrality”ー非実体性ーが、近代演劇におけるキャラクターが“dead”ー死んだ状態であることーつまり、他者（もの）によって自己が形作られ、思考が外在化したコミュニケーション装置となり、家具調度とその身体が融合するような状態のことを示している。

さらに本書は、これらの作家らが描く“spectral characters”を歴史的に考察し、18世紀後半から19世紀初頭に勃興したメロドラマと近代演劇、すなわちリアリズム演劇やモダニズム演劇との連続性を指摘する。本書では、Elinor Fuchsが提唱した“death of character”（演劇における登場人物の脱中心化を表す概念）やMarvin Carlsonの語る演劇的な“ghosting”（過去の舞台上演を想起させるような経験）などを踏まえながら、“spectrality”という概念を用いることが、“dead, enervated, absent, and imaginary”といった単語で語られる近代演劇のキャラクターの特徴を捉える手助けになると主張している（3, 144）。同様に、“old and new materialisms”の連続性を考慮することが、20世紀初頭の近代演劇と上演研究の方法論との結びつきを検討するための豊かな土壌を提供するとも述べる（4）。また、本書の特徴の1つは、演劇的リアリズムにおける小説的な語りの影響を探究している点である。Balkinは、本書が扱う劇作家による演劇以外の作品、特に小説が、これまではあまり注目されて来なかったと指摘する。Strindbergの小説の実験的な語りが如何に彼のドラマツルギーを形成したか、更にはWildeの散文フィクションや批評的ダイアローグが彼のIbsen的キャラクターのパロディ化を理解するために如何に役立つかも問う（22）。

本書は5章から成り、内4章は主に単独の劇作家（Ibsen、Wilde、Strindbergは2章分）を扱う。第5章は、これらの劇作家が後のモダニズム演劇に与えた影響という観点からGenet、Kopit、Beckettを同時に扱っている。第1章“The Spectral Individual: Ibsen’s Dead Realism”では、Ibsenの演劇において、「死んだ状態」（deadness）または「生きた状態」（vital）のキャラクター、小道具、舞台セットが相互に影響し合うことが取り上げられる。Ibsenは、*A Doll’s House*（1879）以降の芝居で、個別の自己を発展させることが、別の人物または事物の一形態となることを示すという。

Rosmersholm（1886）では、進歩的な考えを持つRebecca Westと保守的なRosmer家の旧世代ー屋敷の肖像画や、当人の死後、他者の語りの中などで登場するーとの対立が描かれる。例えば、第3、4、5幕では、Rosmerの後妻として既に亡き前妻Beataと同じ立場になる可能性や、養父で性的関係があったとされるDr. Westの実の娘として、自身の母親の立ち位置にあったことが示され、Rebeccaは、他者（Beata及び母親）の一形態として描かれる。Ibsenは登場人物が心理的な深みを達成するには、現実の舞台調度と同一化し不活性化ーある種死んだ（“dead”）状態ーにしなければならないという矛盾を描いていることが指摘される。

第2章“Imaginary Characters: Wilde’s Unrealized Personalities”では、Wildeの散文作品“The Portrait of Mr. W.H.”（1889）、*The Picture of Dorian Gray*（1891）と、*The Importance of Being Earnest*（1895）を主に扱っている。Wildeが、“The Portrait of Mr. W.H.”で、芸術の目的は、個人固有のものであると同時に既存のタイプの反復としてのパーソナリティの構築であると主張していることに注目する。*The Importance of Being Earnest*の上演においては、パーソナリティは物質的で身体的なものとなっている。なぜなら、舞台装置や小道具が、フィクションであるErnestのアイデンティティをパロディ的に証明する時に、彼は多数の役者によって共有される構築物になるからである。幽霊のようなErnestの存在は、CecilyやGwendolenの語りや、特定の小道具を用いた演技によって集合的に作り出されるものであるが、最終的に彼は、個人としてのアイデンティティと歴史とを備えた実在となる。このことは役者と舞台上の小道具との差異を無効化するWildeの喜劇では可能なのだが、フィクションにおいてはそうではないことが、“The Portrait of Mr. W.H.”と*The Picture of Dorian Gray*の分析を通して論じられる。

第3章“Language and Materiality: Strindberg’s Vampiric Narrators”と第4章“Old New Materialisms: Monist Dramaturgy in Strindberg’s *The Black Glove*”では、Strindbergの小説や戯曲に見られるヴァンパイアやテレパシー能力者などが分析される。彼の小説や戯曲では、これらの超自然的語り手がしばしば登場するが、その自己は他者の生命から成り立ち、その思考は電話回線を旅し、身体は家具と融合したり壁の中に消えたりする。特に第4章

では、Strindbergの Inferno 期（1894-97、自然主義から神秘主義へ傾倒していった時期）に着目し、ドイツの哲学者・生物学者であるErnst Haeckelの Monism（一元論、世界はある一つのもので出来ているとする考え方）とStrindbergの揺れ動く関係性が考察される。Strindbergの後期劇作品 *The Black Glove* を分析しながら、Balkinは、リアリストとモダニストのドラマツルギーや作品の形式を叙事詩形式か戯曲形式かなど、二項対立的に分けることは無意味と指摘するのである（122）。Strindbergの *Miss Julie*（1888）に登場する“characterless”なキャラクターから、後期作品に登場するヴァンパイア、幽霊、テレパシー能力者までを取り上げて、キャラクターとは、人々が期待するような安定したものではないことも追求されている（122）。Strindbergの後期作品では、メタファーが物質化され、不在の存在が生き生きと描かれることにより、キャラクターが人間や生命あるものを超えることが示される。キャラクターの定義が拡張されているのである。

最終章ではGenet、Kopit、Beckett など後期モダニズム劇作家たちが、共有される身体、ドッペルゲンガー、小道具や家具、ジャンル間の変動（generic hauntings―著者はモダニズム演劇ではジャンルが不安定に揺れ動くことをこのように表現する）等を通して、リアリズムとモダニズムの連続性を如何に強化しているかを探究している（25）。本書は、“spectral characters”の分析を通して、メロドラマからモダニズム演劇へのジャンルの連続性、キャラクターの定義の拡張、当時の劇作家たちが執筆した小説など、これまで個別的に扱われがちであったテーマを包括的に論じたこと、さらには、19世紀後半以降のリアリズムやモダニズムと結びつけられがちであった劇作家たちが、超自然的キャラクターたちに着目し描出していたのだと主張する点で、この時代の演劇研究に新しい視座を提供したものと言えるだろう。